Writing for a purpose：中級日本語コースにおける効果的な作文の指導実践例

この発表では、本校での中級日本語コースにおける 作文指導の実践例を報告する。発表の枠組みとしては、課題を与える時期、 目的、タイプ、プロセスの点から述べたいと思う。

秋学期の終わりにスタートするこの課題は事前指導から始まる。書く目的は、学習者が関心のあるテーマについて書くこととし、その上で、前年度の学生が書いた作文を 学習者が読み、彼らから直接話を聞く機会を持つ。これが学年間の橋渡しになると同時に、学習者にも具体的なトピックを探る機会となった。

パラグラフレベルの作文指導としては、田島（2017）の段落構成を参考にした。四つの段落構成はナレーションをする際にも、経験に基づいた自分の意見を言う際にも、適切な量であり構成だと考えられる。また、学習者には、段落内の結束性を高める接続詞や中級で学習する効果的な言い回しもガイドラインという形で明確に示した。

その後学習者は冬休みを使って作文を書き、教師側の 3 回の添削を経て完成へと至る。

この課題設定の際には ACTFL プロフィシェンシーのガイドラインを参照した。中級の日本語クラスにおいては、学習者の言語能力の向上に応じて Writing のスタイルは 四つのタイプに広がり、量的にも段落単位で書けるようになる。ACTFL プロフィシェンシーのガイドラインには、中級-上のレベルの Writing では、学習者は自分の経験に関連した文章や要約を書くことができ、「異なる時制枠を使って順を追って語ること（ナレーション）ができ、また描写することができる。」と述べている。 身近な題材について習った文法項目を使うだけにとどまる初級のレベルに比べ、中級レベルでは、この課題のような 具体的な Writing 指導が一番効果的なレベルではないかと思われる。

次に、学習者が特別なリサーチをする必要のないナラティブライティングでは、はっきりした目的を持って自分の関心のあるトピックについて書くことが書く能力の向上に繋がる（Dumitrescu et al. 2015）という先行研究を参考にした。また、 メッセージを伝えようとする意図が実質的な目的を持っている場合は特にコニュニケーション能力の向上にも繋がる（Mystokowska-Wiertelak & Pawlak, 2017）と考えられるため、この自由課題はただ書く能力だけでなく全体的な日本語能力レベルアップにも貢献できるのではないかと思われる。

更に、複数の添削の具体例を示しながら、 作文が実際どのように結束性、全体的なメッセージの伝達という観点から向上していったかを分析する。また、Writing が他の言語のスキルレベルやスタンダードの 5 C のコミュニティーにどのように繋がったかという実際の例を示し、数年に渡るデータと学習者への意見調査を参照にしながら詳しく述べたいと思う。